

「日はまた昇る」

2007年9月に「VIN 第1号」をお届けしてから、はや4年目になる。VINも今回の発刊で第6号を数え、所期の「年2回3年間で6回発刊する」思いを果たせた。この間に「本来の硝子の良さ」の伝道師役をこの小誌に託したわけであるが、緩やかではあるが、世界の「硝子への回帰」が新たな潮流を生み、わずかながらその潮目が見え始めたことに期待もしている。パリやニューヨーク、サンフランシスコでの「水と硝子ボトル」への取り組み、乳児用哺乳瓶を始めとし大手ビバリッジ専業社でのガラスボトルへの見直し、海外化粧品メーカーでのガラス容器への転換へのアナウンスなど心強いものを感じる。環境汚染や人体への影響などを配慮して人々がこのガラスと言う「数千年に亘る遺産」をあらためて「安心安全」の素材の拠りどころとすることは自然の成り行きと思われる。

私どもは所期の目的とした6回の刊行を終えた「VIN」はしばらく休眠させ、当社の「インターネットのホームページ」とリンクさせた「ブログ」を立ち上げた。より広くの人々と「ガラスと環境」、「新しいガラス容器の世界」を共有化し発信してゆきたい。「ブログ」にはこれまでの「VINのアーカイブ」、「ガラス造りの世界」、「世界の時流」、「香りと名作紹介」また、これからのテーマであるが「ガラスと環境」に取り組む「人々の輪」をお伝えできればとも考え企画中である。これまでの、「VINの読者」にはこの場を借りて「感謝」と「新たな取り組みへの共感のお願い」を発信させていただきたい。

振り返れば、この3年間は多くのことが起こり、奇しくも歴史的変革の時となった。少し古い言い方を使わせていただければ「遅れてやってきた世紀末」なのだろう。とりわけ、2008年秋のリーマンショックとそれに続く世界規模の経済不況は未だ傷から癒えない私達を今も苦しめ続けている。出口の見え難い長期の不況と不透明の時代であるがそのような時代こそ、新たな希望の光が生まれ私達を導く。私達の取り組み、「挑戦なくして勝利なし」の不断の取り組みがそれを生む。古人の知恵を借りれば、「太陽の昇らない朝は来ない」と。この「日の昇る国」にいて思う、私たちは真の「グローバルな視点」でのあらゆる取り組みを行って来たかのだろうか。私たちは未だ国際的な責任を十分果たし得ていないのではないか。私の自問自答は続く。

文化の欄は、これまでの集大成としてあらためて「香り」の文化をテーマに取り上げた。古今東西、老若男女、それぞれ程度の差はあれ、何がしか香りの世界に生き、香りの世界にかかわる。生物の五感の中でも「臭いの分野」、とりわけ人にとって「香り」の存在は特異だ。臭いを利用する生き物は多いが、自ら「香り」を造り、それを生活に利用する動物、これは人間特有か。香りの世界は広く、深い。取材を通じて多くの専門家のご支援を頂いた。とりわけ、調香師の中島基貴氏をはじめ、別府にある「大分香りの博物館」の取材で別府大学の西村駿一学園長、吉田千秋氏、大堂かおる氏にお世話になった。「香りの魔術師」の異名をとるピエール・ディナン氏の代表作品の多くが展示されていることや、また同氏と縁のあるボトルデザイナーのシルヴィー・ド・フランス女史を知ることとなったことは思いがけない「香りの世界の結びつき」ともいうべきか。ご協力戴いた多くの方々はこの紙面を借りてお礼を申し上げたい。

セレブへのインタビューはその世界的に著名なボトルデザイナーのシルヴィー・ド・フランス女史へのインタビューとなった。環境についてのテーマは日本における環境の取り組みの紹介である。

表紙では西洋とアジアを結ぶ「文化」と「交流」の道シルクロードを辿り、今日をあらしめた古人の生き様を追憶し明日への誘いとしての「香り」の文化をヴィーナスに捧げた。

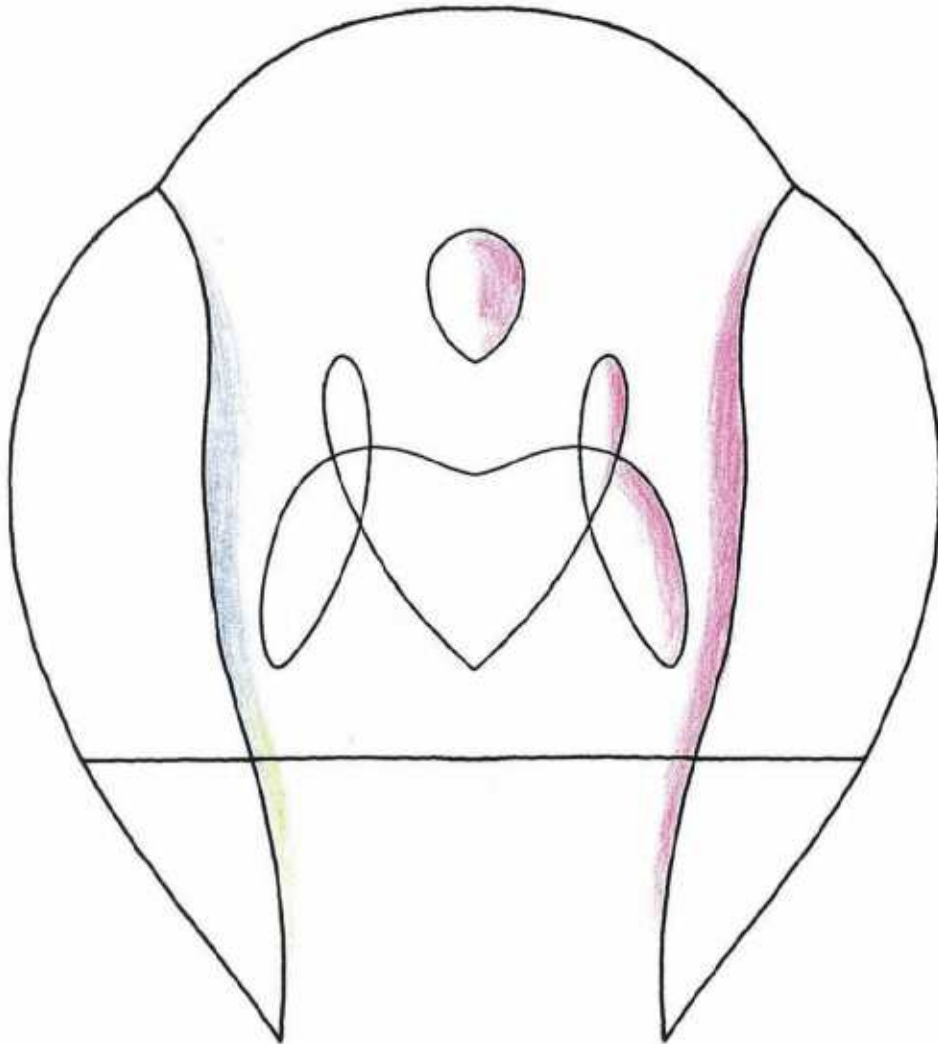
ラリックの収集は続いている。VIN1号でご紹介したラリック好きの彼の淑女とは奇跡的な再会となった。

たまたま立ち寄ったロンドンのラリック店で好みの器のことを尋ねたら、先客で同じようにこれを気に入っているご婦人がいますと教えられ、店の中で、その先客の淑女、あのラリック好きのご婦人との再会となったのであった。

2010年 春

興亜硝子株式会社
代表取締役 出井龍彦

何度も生き還る地球の恵み、ガラス。



「人は誰でも、鏡に正面の顔を見ているようですが、他人には横顔を見られていることが多いものです。三面鏡はいちばん身近な『他者の目』として、女性の身だしなみを見守ってきましたが、その存在は消えようとしています。三面鏡の復活。それは新しい時代にふさわしい機能を備えた鏡によって、初めて夢物語ではなくなるでしょう。」

君知るや
遥か「シルクロード」の
果てるところ

それは

幾百年の時の流れを味方として

ついには

海を越え

日の出する国に至れしことを

ギリシヤ、ローマの「華」

オリエンタルの「夢」

それらが

今に息づくところ

法隆寺の柱のエンタシスは

今もインド由来の仏の金を支える

華やかな法要の舞は

胡の国の仮面の舞

正倉院は帝の夢の宝の蔵

数千におよぶ宝物は

金・銀・ラピスラズリー・銘木

香木・葉草

瑠璃色のガラスの器

駱駝の上の胡人の絵

仏典・書

螺鈿の鸚鵡の琵琶

「絹」の道を辿り、

苦難の海を越えて

此処に至る

「道」は「人」と「物」を運び

「文化」を運ぶ

人と人の出会いそして、

人々の喜びと悲しみも

幾度となく繰り返された古の

国々の栄枯盛衰

ベルシヤ国の王族達の長安にあって

胡菜、胡舞、胡粧、胡服を残し、

カシユガル國の王妃は

「菓の花と香り」を愛し

「伝説」を残す

「香り」は伝わり今に蘇る

「王妃の水」は涙色。二つの愛と香りの物語

花や香りは人類と共にあり、人々の精神発揚の拠りどころでもあった。いつの時代も「香り」のかもし出す「不思議」の世界は尊ばれ、その「香り」には「伝説」が残された。

「イタリアとフランスを結ぶ物語」

1533年の晩夏、14歳のカテリーナ・ディ・メディチは、フランスから差し向けられた華やかなガレー船に、香水で財を成していた薬屋、仕立屋、料理人など多くの召使と共にまるで小さな文化使節団のように船に乗り込み、イタリアに別れを告げた。フランスのアンリー王子への嫁ぎの旅。名家メディチ家はルネッサンス文化のパトロンとしてのみならず、ヨーロッパの代表政治家の役割を果たし始めており、「結婚」という政略の渦中の人となった。父も母も生まれて間もなくこの世を去った彼女は、苦節の幼年期を過ごした。気品に溢れ、気さくな女人として受け入れられて行ったが嫁ぎ先でも不幸が襲う。王となった夫の余りにも早過ぎる騎馬戦での事故死。



以後30年、王太后として、幼い王たちの後見役として、多くの出来事に手を染め阿修羅の如き人生を送った。ともすると「悪女」としての汚名が先に立つ人生であったが、「愛」に生きた「強い母親」でもあった。彼女にはもうひとつ、今日まで「まるで彼女の移り香」のように残したものがあつた。「王妃の水（アクア・デッラ・レジーナ（Acqua della regina）」だ。メディチ家の縁の薬局であり、香水の御用達先でもあつたフィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ教会の薬方から、嫁ぎ先のフランスに興し入れ品として携えた香水の名品であり、今日のヨーロッパの香水の源流のひとつとなつた。

「シルクロードのエレジー」

スウェーデンのアジア探検家スウェン・ヘディンが残した「熱河—皇帝の都」。彼は、その中の第10章を「中国三大美人」の一人香妃のために割いている。「その時、乾隆帝は皇太后や御付の者の目を憚ることもなく、今は亡き香妃（シャムフェイ）を抱きしめて号泣した。まだ温もりのある体からは人を魅了して止まなかつた香りが漂い、顔は安らぎに満ち、笑みさえ浮かべていた——」。

1759年、東トルキスタンを治めていた香妃の夫とホージャ一族は、清朝第六代皇帝の乾隆帝の將軍兆忠との戦いに敗れ、命を落としていたのだ。既に北京の乾隆帝にまで届いていた「香妃の美貌と人を魅きつける体から発する不思議な香り」の評判は帝を虜にし始めていた。夫を亡くしたばかりの20歳の美女は、帝の「命」のまま手厚い保護のもと、シルクロードを辿り都に入った。紫禁城内に彼女の故郷のものに似せた建物を作って住まわせたりしたが、夫の形見の金の懐刀を忍ばせ帝の命を狙うという彼女の復讐心は増すばかり。それでも帝は香妃の歡心を買うために彼女の好んだ「沙枣の木」を故郷から取り寄せたりもしたが、心は閉ざされたままであつた。余りの乾隆帝の体たらくに心を痛めた皇太后は、皇帝のいない日に香妃を宮居に呼び出し、妃の心を問いたです。終にはその「けな気で一途な愛」に同情し、死を許したのであつた。香妃の亡骸は遺言どおり故郷のカシュガルに送り届けられた。故郷には今でも一族と共に彼女の墓がある。「沙枣の香り」も今に伝えられ蘇っている。



シルクロードは多くのものを選び、それにかかわる国々の営みがそこにあつた。「人」は去り「道」と「文化」そして「香り」が残つた。「その香り」は、時の流れに抗うべくもなく身を委ねた「美しき人々」の心を気づかう、やわらかいシルクロードの春の風と光のようにギヤマンの器の中に抱かれ、揺れ動き「時を宿して」今に至る。

A. アクア・デッラ・レジーナ
B. 沙枣(中村祥二氏提供)

1. メディチ家 森田義之 講談社現代新書(1999年)
2. カトリーヌ・ド・メディシス ルネッサンスの相克 中島実穂 文芸社(2007年)
3. 図説 メディチ家 古都フィレンツェと栄光の王朝 中瀬浩郎 河出書房新社(2006年)
4. 乾隆と香妃 長興書部 角川文庫(1956年)
5. ヘディン探検紀行全集II 熱河-皇帝の都 高橋明子 白水社(1978年)
6. 正倉院の世界 監修 北澤太 別冊太陽(2006年)
7. 正倉院展六十回のおゆみ 編集・発行 奈良国立博物館(2008年)
8. スウェン・ヘディンと松岡王國 監修 金子民雄 日本対外文化協会発行(1988年)
9. シーア・コルボーン他/長尾力「奪われし未来」翔泳社(1997年)
10. 黒川高明「ガラスの文明史」香風社(2009年)
11. 「セラミックス」43、No. 12(2008年)
12. 日本ガラスびん協会セミナー(2008年9月29日)
13. 「An old material in the context of new toxicology」
14. 日本ガラスびん協会資料
15. NEWSWEEK(2007年7月4日)
16. 日本経済新聞(2008年6月21日)
17. 読売新聞(2009年9月28日)



コバルトブルーに着色したタブレット

三面鏡ひと模様

情報直視力のバックボーンは「数学」です。
香水ボトルデザイナー シルヴィー ド フランス女史(Sylvie de France)



パリ地下鉄の7bis線のDANUBE駅で降り、シルヴィーさんの事務所二階一室に入ると、明るい、爽やかな笑顔が迎えてくれる。体から活き活きとした自然が香ってくる。そのことを素直に伝えると「バカンスを過ごしてきたばかりだからかしら」と笑う。その笑顔に人柄が出ていふと思う。シルヴィーさんはフランスを代表する香水ボトルデザイナーである。デザインポリシーは、ブランドが持つ個性を生み出すこと。メーカーが求め潜在的に考えている感覚を具体化することであるが、それを通じ今までにない斬新なデザインを追い求めていくことであるという。一般的にメーカーはコミュニケーションやマーケティングを重視するあまり、デザインを疎かにしやすい傾向がある。しかし、商品力をしっかり明確に表現しないと、市場は正しくそのアイテムを受け入れない。だから、デザインが重要であることを、常にメーカーに語っている。特に香水のボトルについては、魅惑的で感動を与えられるものでないと意味がないことを主張している。また、デザインは常に時代を表現するものであるから、時代をどのように認識し捉えていくかが重要であると語る。デザインとは、過去の変遷と現在の傾向、加えて未来の洞察によって創られる。そのデザインを通してメーカーにアドバイスを送り、理解を得て、この商品をもって強力なマーケティング展開してみたいと担当チーム全体が一致した時、デザインプロジェクトは成功するのである。つまり、デザインを生み出すことを通じ、チームの一体感を生み出すことに協力するのが自分の役目であると思っている。

A. 香水ボトルデザイナー シルヴィー ド フランス
B. 代表作の1つ ロード イッセイ 1992年

このような方針でボトルをデザインしているの、大事なポイントは「聞くこと」であるそう。消費者であり、販売員であり、マーケティング部門であり、多くの関係者から聞くことを心がけている。また、「聞くこと」には、鋭い感受性と直感力という能力が欠かせない。直感力を磨くために多くの人と接している。多くの人から情報、ニュースを得ることが大切であり、その情報は多いほどよい。だが、多い情報もそのままでは使えない。多く集めておいて、その中の多くを捨てるという作業が最大のポイントになる。この捨てるというところにも直感力が働き、結果的に、残された情報は役立つものになっている。実は彼女は昔から数学が得意だった。数学の基礎があるから、情報入手取っているのだと思っ



ているのだと思っ。入ってくるもアウトプットすることを武器デザイナーになって22年。として先駆者であると自負歳月は、すべてが財産にそれは創作であり、マーケティングであり、技術であるが、この三位一体と彼女は認識している。理想としては「シルヴィーらうと市場から受け入れ話を確立したい。それは、持たせるデザインを常にあるという意味であつて、価値をかなり受けるように趣味は庭園関係、実は昔

にデザインしてもらられる」という神メーカーに自信を提案できる人間で最近ではこの評なっている。Bは庭師になりたかつたのだと笑い、今は家庭菜園で楽しんでいるというシルヴィーさんの語りから、最初に感じた「活き活きとした自然」が再び香ってくる。

トピックス 「水に溶けるガラス」—うそのような本当の話

ガラスの用途は様々である。「ガラスが水に溶ける」と聞いたら耳を疑う人が多いはず。本来ガラスは物理化学的に耐久性の良い材料であり、その特性を利用して窓ガラスや容器等に使われている。しかし、意外かもしれないがガラス組成の調整で「水に溶けるガラス」を作ることができる。数ヶ月から数年にわたりゆっくりと水に溶け出すわけである。

このガラスに銀を添加してガラスに融かすと銀はガラス中に分子レベルで均一に分散する。水分の働きでガラスが溶けると同時に銀も徐々に放出され、この銀の作用で細菌の増殖を抑える事が実証されている。これが「水に溶けるガラス」無機系抗菌ガラスである。

この「水に溶けるガラス」は意外にも我々の身のまわりの家電製品、設備機器、台所用用品から繊維衣料まで身近なところで幅広く使われている。

※材質は基本的に無色透明のガラスであるが、清潔感、清涼感を出すためコバルトブルーに着色したタブレット(写真)も使用されている。

- 参考文献
1. メディチ家 森田義之 講談社現代新書(1999年)
 2. カトリーヌ・ド・メディシス ルネッサンスの相克 中島実穂 文芸社(2007年)
 3. 図説 メディチ家 古都フィレンツェと栄光の王朝 中瀬浩郎 河出書房新社(2006年)
 4. 乾隆と香妃 長興書部 角川文庫(1956年)
 5. ヘディン探検紀行全集II 熱河-皇帝の都 高橋明子 白水社(1978年)
 6. 正倉院の世界 監修 北澤太 別冊太陽(2006年)
 7. 正倉院展六十回のおゆみ 編集・発行 奈良国立博物館(2008年)
 8. スウェン・ヘディンと松岡王國 監修 金子民雄 日本対外文化協会発行(1988年)

3500年前のガラス容器が語りかけてくる。 地球と人類のこれから。

— 環境にやさしいガラスびん —

「洋上のアルプス」と呼ばれている世界遺産の屋久島を訪ね、「苔むす石」、「樹齢数千年の屋久杉」の中を散策すると、大自然の不思議さに飛びきりの感動をうける。太古に近いと実感できる自然が、そのままの姿で現存しているのである。一方、ガラスは約5,000年前、西アジアで誕生し、その技法が古代エジプトに伝えられた。完全な保存状態で今日に伝わる最古のガラス容器は、トトメス3世の紋章入りの杯で、3,500年前のものである。東西の地で悠久の時を超えて、何ら変相することなく、今に残る「屋久島の自然環境」と「エジプト・ファラオのガラス器」は「時の遺産」でもある。

ガラスびんは透明感、輝き・光沢、化学的安定性、臭いが付着しない、



造形の自由度が大きいなど、他の素材にはない大きな特徴があり、その歴史は、ほとんど人類文明の進歩と符合するといつてよい。

ニューヨークのメトロポリタン博物館に、日本の醤油



びんが現代を象徴するデザインとして展示されている。

20世紀に入り、有機合成化学が急速に発達し、現在、地球規模で取引されている合成化学物質は10万種以上に上る。

いわば現代人は化学物質に満ちた「カクテル」の中で生活していることになる。われわれは、多かれ少なかれ、日々の生活を通して飲料、食物、薬物、あるいは呼吸、皮膚から、それらの物質を体内にとり込んでいるのである。

1990年代以降だろうか、日本では、従来からのガラスびんから、利便性の高いプラスチックを応用する容器へ急速に移行しているが、これらの容器は微量であるが、内分泌かく乱物質（環境ホルモン）が溶出していると報告されている。

化学物質と近年増加している子どもの健康異常の因果関係は、まだ科学的に解明されていない（アトピー、小児ぜんそく、ダウン症、低体重など）。

2010年秋から環境省は、母親の胎内に蓄積された150種類以上の化学物質が子どもの発育や健康に与える影響について、大規模な調査に乗り出す。10万人を対象に、12歳になるまで調査を長期的に継続する。一方、充填された中身と品質が長期間にわたり、安全に保てることができる「珪砂・ソーダ灰・石灰石を溶かした人工石」のガラスびんは環境ホルモンなどの不安がないので、容器として大きな魅力の一つといえる。



米国では脱プラスチック容器を目指す都市もでてきた。2002年冬季オリンピックが開催されたユタ州ソルトレイクシティの市長はプラスチック・ボトル入り飲料を目の敵にしている。

大半のミネラル・ウォーターは石油から作った容器に入れられ、車両や船舶で輸送される。「とんでもなく環境に悪い」と言う。温暖化防止のため、水道水の復権を図る市長が増えている。

日本の国民一人当たりのガラスびん生産量を1とすれば、イタリアが5.9倍、フランスが5.8倍、スペインが4.8倍、ドイツが4.7倍となり、ヨーロッパ人はガラスびんに根強い愛着を持っていることがうかがえる。ヨーロッパでは、びんの需要の増加傾向が続いている。しかし、ガラスは溶融プロセスで重油などの化石燃料を多く消費するので、環境課題として、CO₂の排出削減問題を抱えている。国内全産業の中で、ガラス業界全体では約1%、ガラスびん業界に限定すると約0.2%のCO₂排出量である。

現在、溶融プロセスでのエネルギー効率を高め、CO₂の排出を削減する技術として、溶融ガラスへの直接通電加熱法、酸素燃焼法、重油からガスへの転換が進んでいる（ガス燃料のCO₂排出ガスは重油の約70%）。2005年から顆粒状にした原料を気中で直接高温溶融して、ガラス化する新しい溶融プロセスの研究が続けられ、プロセスの短時間化による大幅な省エネルギーが期待されている（CO₂排出量が半減できる見込み）。そして2013年にも実用化が予定されている。

また、全国的に展開されているガラスびんは3R運動（*1）により、環境と経済が両立した循環型社会を構築するのに適合し、「負の遺産」を残さず、環境リスクのない材料であることが理解されている。ガラスはリサイクルにおいても、原料（カレット）として再溶融されると、もとのガラスと同価値のものを創出できる。

当社が生産している化粧品用ガラス容器をはじめとした多彩なガラス製品は、日常生活の中で充填物に対して、安全・安心を保證できる容器として、また社会の中で循環でき、真に信頼されることを目指している。



(*1)
: Reduce (びんの軽量化)
Reuse (びんの再使用)
Recycle (びんの再資源化)

A: 屋久島「白谷雲水峡(ものけの森)」
B: 屋久島「縄文杉(樹齢7,200年)」
C: コア・ガラス香油びん(フェニキア、紀元前2世紀~1世紀)『大分香りの博物館』蔵
D: 眞亜硝子のガラス製品例



眞亜硝子株式会社

<http://www.koaglass.co.jp/>

本社 〒132-0035 東京都江戸川区平井1丁目25番27号
マーケティング本部(直通電話)
大船工場 〒251-0013 神奈川県横浜市小坪23番
市川工場 〒272-0120 千葉県市川市千鳥町2番
大阪営業所 〒541-0041 大阪市中央区北浜3丁目1番14号
タカラ記念ビル3階

TEL.03(3684)1211(代)
TEL.03(3684)2705(代)
TEL.0466(23)5421(代)
TEL.047(397)4101(代)
TEL.06(6229)1619(代)

今回「VIN」発刊に当たり多くの方々にご協力を頂きました。

取材協力：大分香りの博物館 <http://olta-kaori.jp>

サンク・マリア・ノヴェッラ製薬 TEL.03(3572)2694
<http://www.santamarianovella.jp>

上海高純玻璃有限公司 〒201801 中国上海市嘉定区马陆镇金园一路80号